

佐吉石仏考 I II III PDF版 奈良から Coma-たんさく人

2014 年 4・8 4・23 5・13 HP に掲載

丹波佐吉の石仏と狛犬を考える

「丹波佐吉石仏」考 II

「丹波佐吉石仏」考 III

奈良から Coma-たんさく人

幕末期の日本の石工が到達したぎりぎりの限界の役行者像

丹波佐吉 「石仏」に生涯を捧げる

● 「丹波佐吉石仏」考 I ●

2014、4、8

Coma-たんさく人

M・K

江戸時代末期の名石工

● 「丹波佐吉石仏」考 I ●

Coma-たんさく人 M・K

●「佐吉の石仏」と「観音山西国 33 所観音石仏(三重県亀山市関)」について

◆3点目の「源」銘を、この観音山29番石仏に刻む◆

丹波の佐吉は、「狛犬を彫る」よりも、「石仏を彫る」ことに生涯を捧げたのではないか。

単純に作数で考えると、石仏計61体(推定を含めると64体以上?)、狛犬計20体(現存18体)で、3倍以上の数である。

◆幕末期の日本の石工が到達したぎりぎりの限界の役行者像(舍利尊勝寺)◆

— 金森敦子氏 —

佐吉の石仏の最高傑作の頂点は、大阪舍利尊勝寺役行者像である。幕末期の日本の石工が到達したぎりぎりの限界がこの役行者像だといってもよい(一金森氏)。しかし、どうしても以前から心にひっかかっていた「大師山石仏19番地藏像」から「舍利尊勝寺石仏」へと結びつかない不自

然さがあった。あまりにも直球すぎる矛盾？があり、彫る技はそう簡単に習得できる、磨けるものでないことはすぐ判る。

1855年法正寺地蔵完成までは、計24体で、そのうち弘法大師座像の15体が含まれている(精巧な技はあまりみられない)ので、実際は10体ほどで精巧な技を磨いていたにはかならない。それが、舍利尊勝寺石仏(一実数の59・60体目)へどうしても結びつかなかった。

なぜ？が、今回「観音山石仏」を実見し、詳しく観察した結果、この疑問が解けてきた。この「観音山石仏群」は、安政元年1854年から3年間の歳月をかけて制作されたといわれている(一完成は1862年であろう)。中でも「11番上醍醐寺准胝(じゅんてい)観音」と「29番松尾寺馬頭観音」の2石仏は、特に気になる石仏である。

少し概略してみる。

■准胝(じゅんてい)観音は、日本では作例が非常に少ない観音菩薩である。その11番石仏は、台座に紀年銘「**文久二戊年**□**作師照信花押**」(1862 年)と刻まれ、石仏群の中で確認できる年号はこれだけである。これを考えると、石仏群の集大成の記念として、「准胝観音石仏」を多くの時間を費やして彫りあげたのかもしれない。五寸三分の狂気(一金森敦子氏一大師山19番地蔵)といわれている佐吉の技が、この観音山で石仏を極限近くまで彫るにいたったのであろうと十分推察される。33体中、28体が佐吉の作であり、全てにわたり手を抜いていない。複雑な色々な光背(火炎、舟形、二重円、放射、等々)、台座(蓮華座、岩座、等々)、蓮華(れんげ)、絹索(けんさく)、錫杖(しゃくじょう)等といった持物(じぶつ)に至るまで一つ一つ彫りきっている。様々な観音像(仏像)の基本は熟知しているし、33札所本寺の個々「本尊」「お前立ち像」の特徴も知りつくした上での彫り・造りであることに間違いない。

「16番清水寺千手観音」は、他の千手観音と異なり、42本の手(腕)の中で、2本を頭上にかざして化仏(けぶつ)を支える珍しい形であること知ったうえでそのように石仏を仕上げている。

准胝観音像は普通合掌しない観音であるといわれているが、ごく稀にある合掌の形で、「10番三室戸寺観音像」は二臂(腕が2本)でありながら千手観音といわれている通りに、それぞれ彫りあげている。

■次に、「29番松尾寺馬頭観音石仏」である。

怒りの形相・火炎光背などで馴染みが深い「不動明王」が、大師山石仏群の中心になる「仏」として、どっしりとした基壇をもつ総供養塔の一段高い石祠に座して周りを見据えて大師山霊場を守っている(総供養塔、全て佐吉一人で彫った)。

一方、同じように観音山霊場の中心「仏」として、佐吉は「馬頭明王」と呼ぶこともある「馬頭観音」を特別に選んだ。迫力満点のあの怒りの形相(三面)の造り・手の込んだ火炎などを彫りあげ、佐吉独自のスタイルの脚付台座まで手を抜くことなく正面は牡丹唐草模様を薄肉レリーフでもって丁

寧に仕上げている。(模様の実見できる他の石仏台座もそれなりにレリーフは彫ってあるが、丁寧さに差がある……)。

佐吉は「傑作石仏」を彫り終えたことでもって、銘「**作師 源照信 花押**」と刻む。この石仏だけ「**源**」銘である。特別な「石仏」である。自分の技を極めた観音石仏(群?)であるとの自負がある。だからこそ、佐吉のこれまでの全石造物で、3点目の「**源**」銘を使った。1・2点目は、あの故郷の丹波・柏原の「石狐像・北山稻荷神社(1858年)」と「狛犬―最高傑作―柏原八幡神社(1861年)」である。「仏を彫る」ことの技の充実感で、この「29番馬頭観音」石仏(あるいは、石仏群全体を指す?)を彫り造り終えた時の佐吉の特別な「心」が読み取れる。

ところで、「堅く、力に満ちて、そしてあくまでも静かな狛犬・柏原八幡(―金森氏―)」は、文久元年(1861年)に完成し、その後まる三年の間は佐吉の足取りが消えてしまっている(―金森氏著書で―)と書いているが、すぐに故郷をあとにして関(観音山石仏現場)をめざしたのである。まさしくこの八幡神社狛犬完成年前後数年間はほとんど一人黙々と「関・観音山」で石仏を彫り続けていたに違いない。故郷での最高傑作狛犬を完成させたにもかかわらず、その充実感にゆっくりと浸る時間などないくらいに佐吉は忙しかった。

その1年後に「**紀年**」銘のある11番上醍醐寺観音石仏を造り終えている。

以前の大師山石仏現場で「石仏などのきめ細かい細工が必要になってくると、どうしてもひとつ切れが悪くなる(―金森氏―)」ところがあると一つの不安があった佐吉は、和泉砂岩で「全ての石仏を」との思いを強く持ちながら、日々平井・大師山の地で過ごしていた。その間に色々と石仏を彫り続けている。

全ての石仏を年表的にまとめてみる。

※ 詳細石仏制作年表PDF版参考 ※

改訂版 [m51-skechi-kannon-nen01.pdf](#) へのリンク

①「石仏」制作前期(1850年代前半まで)(佐吉――1885年で40才)まで、

石仏を整理すると以下ようになります。

大師像15体、 地蔵立像、 長谷寺式観音、 ヒナ女人石仏、総供養塔不動明王(1852年)、
19番地蔵像(1853年)、大燈寺聖観音(1853年)、 善光寺三尊石仏、
法正寺地蔵(1855年)、 徳源寺布袋像、

以上計24体を彫っている。 ほとんどが奈良の宇陀平井の地である。

佐吉1855年で40才。

②「石仏」制作後期(1850年代後半～)は、奈良各地、三重、大阪である。

松尾寺境内千手観音(1856年大和郡山市)、 明日香道標4小石仏(1858年)、
観音山石仏―28体(1862年三重県亀山市関)、

役の行者像(奈良・橿原市小槻町 道標)
舍利尊勝寺役の行者像(大阪市)、
舍利尊勝寺11番上醍醐寺准胝観音像(1864年大阪市)
不動明王(一上山家一)(1866年丹波市大新屋)
計37体である。佐吉、1866年で51才。

一方、「狛犬」の数と技をみると、「石仏制作前期」に、優れた作である川上神社・神楽岡神社・宇太水分神社狛犬を彫り、この「前期」で佐吉独自の狛犬スタイルを確立したと思う。しかし作数は八王子狛犬を含めても4点のみである。

逆に「石仏制作後期」期の狛犬は、久米神社狛犬(1855年)から16点もあるが、大雑把に言えば「技・スタイル」の点からはあまり飛躍していないと思う。(もちろん故郷の八幡狛犬は特別である。又、摩気神社(京都)・天神社(近江)の一味違った独自スタイルもあるが……?)。

これらのことから推察するとこの時期は、時間を関・観音山石仏に全精力を傾けなければならなかった時期である。研ぎ澄まされる技(心)の向上は、当然石仏作数にあると直感的に「石仏制作前期」で感じとただろうから、本格的に一人で全ての西国33所観音像(仏)を、1854年ごろから彫る決心をし、「仏・石と対話」し続けていたに違いない。

あの舍利尊勝寺石仏は、この28体観音山石仏制作の「激しい情熱」が生んだ最後の最後の作であつたに違いない。

大師山・不動明王、観音山・馬頭観音の怒りの形相は、「石の尺八」を彫ったプライドからの飛翔であると共に、今までの人間佐吉・石工として、生涯をかけてとりくんできた石造物＝石仏の集大成にしたかったと思うし、「激しい情熱」は、「石仏制作後期」に佐吉が最も望んだことかもしれない。

2014、04、08

Coma-たんさく人 M・K

※金森敦子著「旅の石工 丹波佐吉の生涯」 法政大学出版局 1988、9、20 昭和 63 年

※主要参考文献……今までこのHPで掲載した文献です。

◆追記◆

※三重県亀山市関-----関宿(せきじゅく)は、江戸時代、
東海道五十三次の 47 番目の宿場として賑わう。

古代から交通の要衝。この「宿」から滋賀・京都方面への宿場町へと続きます。

また、この「関宿」を分岐点として、京都方面からの伊勢参宮旅人は、南方面への「伊勢別街道(伊勢への短距離道)」を通り参宮する。西方向の大坂・大和からの参宮旅人は、大和街道を通り、この「関宿」へ至り、ここから「伊勢別街道」を通り参宮します。

ですから、西・北・東3方面から多くの旅人が集まり大変にぎわっていた町である。

観音山は、江戸時代初期に、沙門照遍(さもんしょうへん)という僧が浄財を募り山腹に観音堂を建立し、十一面観音像を安置したことにより、この山の名前がつけられたと伝えられている。

このにぎわっていた「関宿」観音山に、西国 33 所観音巡り霊場をその地域の「観音講」の人々の寄進により、石仏の安置が計画された。その石仏の石工に、佐吉が選ばれた。またとない生涯に一度あるかないかの大仕事で喜びもあったが、反面その地域の人々に、あるいは多くの旅人にうけいられるかどうかの厳しさもあり、不安もあっただろうと思う。平井・大師山四国 88 所霊場とは比べものがない程の「仏」を彫る「技・心の厳しさ」が頭に浮かんだと思う。

佐吉 40 才代前半から彫り始め(?）、40 才代後半に完成。

幕末期の日本の石工が到達した……………

丹波佐吉 「石仏」に生涯を捧げる

● 「丹波佐吉石仏」考Ⅱ ●

●「関・観音山西国 33 所石仏群」●

安政元年(1854)から始まり、文久三年(1863)に完成する。紀年銘で確認される。

2014、4、23 Coma-たんさく人 M・K

●「関・観音山西国 33 所石仏群」●

安政元年(1854)から始まり、文久三年(1863)に完成する。紀年銘で確認される。

◆紀年銘資料

①「第11番上醍醐寺准胝(じゅんてい)観音」

台座に紀年銘「文久二戌年□作師照信花押」(1862年)

②「第8番長谷寺十一面観音」(作:照信 花押)前の標識 下……画像

「第八番 長谷寺」「文久三癸亥年七月日」(1863年)

「施主一千人建之」「願主坂良齊」

③ 第1番青岸渡寺如意輪観音、銘「安政元年」(1854年)

第2番紀三井寺十一面観音、銘「京都石工 笹屋宗七」

第1番石仏・第2番石仏は、同一石工で、「京都石工 笹屋宗七」である。

「丹波佐吉石仏」考 I で、佐吉の石仏制作の大筋は述べてきた。
この「関・観音山」の紀年等に関して少し資料を追加したい。

②の銘をどうとらえるかは述べていなかったが、この標識銘の刻字・文久二癸亥年(1862年)で、「施主」名「願主」名も刻されていることから考えて、「第8番長谷寺石仏の完成」=「関・観音山石仏群の完成」したことの記念碑ととらえて間違いないと思う。刻字は佐吉風ではない。

③は、「石仏」考を書いた後にわかってきたことである。銘の判読できる範囲です。他に色々と文章が書かれています但判りません。おそらく、石仏を安置するについての詳細な謂れだろうと予想がつきます。

これらの①、②、③から、石仏群は、安政元(1854)年から9年の歳月を経て文久三(1863)年に完成されたことが確認される。

—— 「観光:現地石仏巡り説明文」

「嘉永七年(1854年)から安政四年(1857年)までの三年の歳月をかけて刻んだ………」 ——

—— 「鈴鹿・関町史」(昭和52年1977年刊)

「安政年間、大阪の名石工村上佐吉が三年の歳月をかけて………」 ——

ちなみに、あの「平井・大師山石仏群」の未完成番外「長谷寺式観音石仏」は、この「観音山第8番長谷寺石仏」と全く同じ容姿(像高はちがう)であるので、佐吉作と断定できる。

■ところで、大師山:未完成「長谷寺式観音石仏」について、金森氏は著書で次のように書いている。

※(—— 柏原の義父伊助の死—— 物理的に作業中断)

※(伝:安政三年に彫られた—— 金森敦子著書より)

————— 私はこの像をさして重要なものとも考えていなかった。軟石で風化が相当にすすんだようにも見えるが、観音の中にはやわらかな微笑が浮かんでいる。観音には

何の銘も入っていない。佐吉の作だという確証は何一つない。にもかかわらず、私には、これこそが佐吉の最後の作にちがいないという強い実感があった。淡輪で彫った六センチの阿弥陀如来像と同様の雰囲気が色濃くしみ出している。佐吉が最後の力を振りしぼってたどり着いたのは、長谷寺ではなく、力が漲っていたときに自分が彫った石仏で飾りあげた大師山だったのだ。—————

この金森氏の未完成石仏についての「佐吉の……作にちがいないという強い実感があった」という箇所は、まさに当たっていたのである。

しかし、佐吉が最後の力をふりしぼったのは、その後約10年間(「石仏」制作後期 —『「丹波佐吉石仏」考Ⅰ』 参考)、佐吉の石仏制作絶頂期である。ということは、身体・心・石・仏と毎日毎日対話しながら8年間彫り続けたのである。

そして、第八番長谷寺観音石仏の完成。かなり気になっていた大師山未完成長谷寺式観音石仏を、全く同じ容姿でもう一体この関・観音山で彫りあげ、笠付角柱型石祠に坐したのである。他の石仏とは、**区別するために別格に扱った、そんな佐吉の心が現れているように推察される**。基壇にはこの山の露頭している自然石・岩盤をそのまま使い、石祠を嵌めこんでいる。

◆第八番長谷寺石祠・標識◆

基壇:正面幅約300cm、高さ約120cm、奥行き約160cm

石祠:四角柱——正面幅73cm、奥行き72cm、高さ97cm、

笠の部分——幅125cm、宝珠まで含めての高さ約72cm 材質は基壇から宝珠まで全て同じで、この山の礫岩と思われる。

・傍の標識 : 基壇は岩盤の上にもう一段岩石で小基壇を造っている。その所に花崗岩製の標識を嵌めこんでいる。

正面幅、奥行き24cm四角、高さ114cmの四角柱、笠の部分幅約42cm、高さ約20cm。

灯火する火袋もあり、おそらく使っていただろう。

■現在の石祠の様子■

・正式な笠付角柱型石塔(石祠)を造っている。(石工が造る)

第8番長谷寺十一面観音石仏単独。

・大岩盤石を直接掘り、石仏を安置できる空間・大きな祠を造っている。

(※ 4G=4グループと整理するセットグループ名です。

坐している石仏の右端札所番号で名付けています。)

4G(4番—22番—29番—33番—23番)

5G(5番—30番—13番—26番—28番)

19G(19番—17番—18番—24番—11番)

20G(20番—15番—7番—6番—27番—10番)

31G(31番—21番—14番—16番—32番)

・1G(1番—2番)

大岩盤石を直接掘り、天井部分は6枚の板状花崗岩で覆っており、正面上部の庇部分は岩石とコンクリートで造っている。この第1、2番石仏は、他の石仏と違い、それぞれ像高約150cm、約172cmと大型である。(他の石仏は、約60cm～88cmぐらいである。)

・3G(3番—9番—25番)

背後の岩盤と前の部分(小岩石とコンクリート等)で全体を造っている。

・小笠付角柱型祠、全てコンクリート製。

第12番岩間寺千手観音石仏単独

現状の祠は以上のようなものであるが、**石仏群完成時(江戸時代末期)のものは、第八番である可能性が高い**。その当時は、大師山霊場石仏群とおなじように、おそらく観音山全体に「三十三所石仏」を巡らした霊場であったのだろう。当時、安政の頃、関宿には商人等の参詣者も多かったので、観音院(寺)の僧が近くの観音山山腹に祈願所を設け、旅人の道中安全や関宿の商売繁盛を祈ったようである。それがきっかけで、西国33霊場巡り観音石仏の安置が計画されたのである。江戸時代、庶民に観音巡礼・参宮詣が広まり、特に東国からの巡礼者が増え、観音巡礼では熊野詣から巡礼を始める人も多かった。ですから、当然東海道53次の分岐点である関宿・亀山宿には多くの人が集まり賑わっていたのである。

けれども、その後何らかの事情で山全体を整備し、その際に5～6体の石仏を集め現在に至ったと考えるのが自然であろう。それぞれ石仏グループ石祠は一段高い所に設けられており、整備された石階段を上がりお参りできるようになっています。石祠は、何回か整備しなおしていると思われる箇所もあります。このことについての直接資料・文献が今のところないので、詳細は全く判らない。

今後、江戸時代の末期にあった観音院(寺)関係の資料と33所石仏安置時、および上述の整備—石仏が集められた?—一時の資料などに焦点を定めて探っていきたいと思う。

◎観音山に関して以下の史実があります。

・大正14(1925)年——全山焼亡—その後復旧。

・1945年(終戦時)以前の戦争中の昭和18(1943)年ごろ

観音山の西麓斜面含む地域に、

「関防空工場」の建設が大規模に始められた史実。
この2史実、その時に山全体を整備し、石仏群も移動したのかもしれない……………？
あくまで推測の域をでていないが……………？

□■□——「第11番の准胝(じゅんてい)観音」の補助資料——□■□ 下……画像

上醍醐寺の本尊は秘仏であるが、「御影」でもって探ると、佐吉は忠実に彫り造りあげている。

※金森氏……金森敦子著「旅の石工 丹波佐吉の生涯」

法政大学出版局 1988、9、20 昭和 63 年

◆◆◆ 第八番 長谷寺 石祠 標識 ◆◆◆



扶桑唯一
降臨醍醐山

准胝佛母尊
誓嗣子安產



扶桑唯一
降臨醍醐山

准胝佛母尊
誓嗣子安產



丹波佐吉 狛犬・石造物と石仏制作年表 改訂版 20140517

丹波佐吉 狛犬・石造物と石仏制作年表 20140408 Coma-たんさく人 改訂20140517						石仏数	佐吉の年齢才	大師山石仏群	観音山石仏群	尊勝寺石仏群
●印 大師山石造物関係										
狛犬・燈籠・道標 標識・墓石 ※数字 狛犬			石仏名							
0	天神社(台座のみ)	弘化4	1847				32			
			1853	嘉永4						
1	平井八王子神社	嘉永5	1852	嘉永5	●不動明王・総供養塔	1	37			
				無銘	三尊石像普光寺美登路家所蔵	2				
●	番外五重塔	不明	不明	不明	●地藏立像第1番横	3				
			不明	不明	●番外長谷寺式観音 立像	4				
				不明	●番外 女人の石仏	5				
			不明	不明	●●●●● 弘法大師坐像15					
					●●●●●●●●●●●●●●	20				
			不明	不明	●●●●● 札所石仏11	31				
					●●●●●●●					
2	丹生川上神社中社	嘉永6	1853	嘉永6	●19番立江寺地藏尊 座像	32	38			
			1853	嘉永6	聖観音 大燈寺	33				
3	神楽岡神社	嘉永7	1854				39			
	道標・平井分岐点	嘉永7	1854							
4	宇太水分神社	嘉永7	1854							
	石燈籠宇太水分神社永世燈	嘉永7	1854							
				不明	布袋像 徳源寺	34				
	石燈籠大師山入口	安政2	1855	安政2	地藏 法正寺 海會寶塔	35	40			
	石燈籠宇太水分神社常夜燈	安政2	1855							
	石燈籠六柱神社永世燈	安政2	1855							
5	久米御縣神社	安政2	1855							
	石燈籠神楽岡神社奉燈	安政2	1855							

[illegible]

幕末期の日本の石工が到達した……………

やはり丹波佐吉は、「石仏」に生涯を捧げた！！

石仏総数72体にのぼる！！

江戸時代末期の名石工

● 「丹波佐吉石仏」考Ⅲ ●

●「平井・大師山四国 88 所石仏群」●

大師石仏以外の「佐吉作石仏」が、11体坐す。

2014、5、13 Coma-たんさく人 M・K

石仏総数 72 体以上制作する

●「平井・大師山四国 88 所石仏群」●から

第1番霊山寺釈迦如来石仏(B形式石仏)は、「佐吉石仏」である。このB形式石仏は 11 体あり、佐吉石仏である。

佐吉の石仏制作について、「関・観音山石仏」を観るなかで、石仏の原点であろうと思われる「大師山石仏群」をやはりもう一度検討しなければならないと思う。

今までの事を整理しなおしながら、その中で新たに推測される佐吉石仏について述べていきたい。

大師山の石仏群の中で、基本的に佐吉銘のある石仏と大師像15体、長谷寺式観音石仏、五重の塔などについては、今までに既に整理(※金森氏)されてきたのであったが、その他の石仏について詳しくは判らなかったのが、今回できる限り石仏群全体を視野にいれながらみると、明らかに判ってきた事があります。

石仏の形式を大雑把に整理。

「— A — 大師像グループ」(推:佐吉作) 画像①

「— B — 札所第32番形式石仏グループ」 画像②

「— C — B形式以外の石仏グループ」 画像③

の3グループに分けられる。

(※金森氏——著書 p171 大日如来像画像の説明文

「目の荒い石を使いながらも細工はこまかい。これもおそらく佐吉自身の作かと思われる。」

———上述のBグループに属する。———)

■ B形式グループは、佐吉石仏である。11 体、坐す。 ■

この形式石仏は、岩座的なスタイルの台座に、「蓮華座に坐す石仏本体」を安置し、札所番号をこの台座の正面部分に横書きに刻んでいる。坐像の石仏本体の彫り方は、大師石仏の坐す彫り方に非常に似ている。立像石仏の持物など、例えば錫杖の棒部分は「棒」として彫りきっており、このような彫り方は、「関・観音山 佐吉石仏」の精巧な技と共通している。石の材質は、和泉石と違って大師山付近から産する阿蘇石・カマト石で、あまり細工にむかない？と言われているのにもかかわらず、石仏を精巧な彫り方で造りあげている。

光背には、仏の右側に仏像名(縦書き:薬師如来、十一面観音、他)、左側に寺号名(縦書き:霊山寺、金泉寺、他)が刻まれている。真横から見る光背は、上の部分が深く前にせりだすカーブを描いている。光背でこのような同じカーブを描いているのが第1番石仏横の「番外・地藏菩薩立像」(画像④⑤)で照信銘の佐吉石仏であり、しかも台座も岩座型のB形式ですから、B形式石仏は佐吉の作の可能性が強い。

このB形式の岩座的な台座型は、「関・観音山石仏群」の佐吉石仏のスタイルと同じであり、松尾寺境内千手観音石仏(銘:照信花押、奈良県大和郡山市)もこのスタイルの台座である。

佐吉はこの岩座的な台座型を大師山で独自スタイルとしたと思う。

このことは、「関・観音山 佐吉石仏」を知る中で判ってきたことである。

「大師山石仏」だけ観ていても、確かな石工銘がないので同一石工が造ったと判るだけである。

この台座型Bグループは、今回の詳細観察で「観音山:佐吉石仏」に繋がる点であると思われる。

それでもう一点、確かに「佐吉作」と強く思われる作風の「刻字」があります。

第1番霊山寺石仏の「一番」刻字である(画像⑥⑦)。

石仏群の中の「十九番」(画像⑧)「四十五番岩谷山」「永世燈」などの刻字は共通してかなり深く刻する佐吉独自の彫り方である。「一番」刻字も明らかにこの彫り方である。ですから、釈迦如来石仏そのものも佐吉が彫ったということであるし、岩座的な台座も佐吉説をさらに強める点でもある。またB形式の札所第32番十一面観音石仏(画像⑨)についても触れておきます。

この石仏の右側に「ひな」女人石仏(銘:照信作花押)が坐している。この両石仏の刻字を比べてみた場合、「信」「浄譽如徳信女」という刻字などは全く同じであり、佐吉が彫った十一面観音石仏にはほぼ間違いがない。ですから、B形式石仏(11体)は、同一石工の「佐吉」であると考えていいと思う。

以上の点から、佐吉石仏は、「丹波佐吉石仏」考 I で述べてきた「石仏」制作前期の総数は、24体から35体になり、石仏総数72体(推定含むと75体以上?)にのぼる。

ですからこれまで述べてきたように、やはり佐吉は「石仏」に生涯を捧げたことに間違いがないと思われる。

※ 詳細石仏制作年表PDF版参考 ※

改訂版 20140517 ~~m51-skehi-kannon-nen02s.pdf~~ へのリンク

金森氏……金森敦子著「旅の石工 丹波佐吉の生涯」

法政大学出版局 1988、9、20 昭和 63 年

画像①大師像



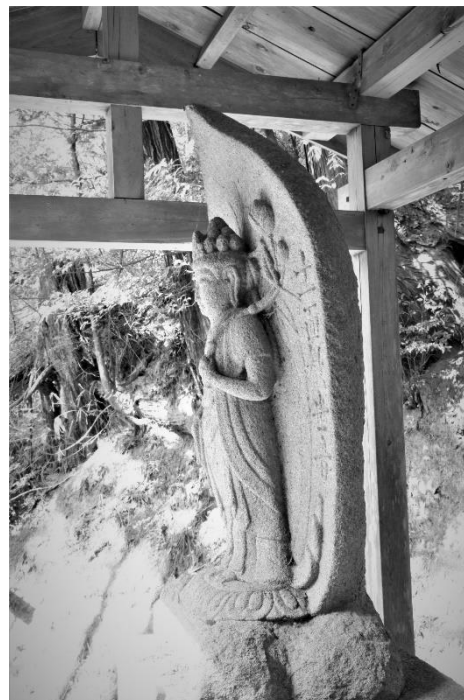
画像② B石仏グループ



画像③ C石仏グループ



画像④ B石仏グループの真横からの光背



画像⑤ 地蔵菩薩立像の光背



画像⑥ 第1番釈迦如来



画像⑦ 一番刻字



画像⑧ 十九番刻字



画像⑨ 第32番十一面観音・ひな女人石仏



第32番十一面観音

ひな女人石仏